<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>题目</td>
<td>「帰国子女の心理性」について「文化差体験が人格形成に及ぼす影響に関する一考察」</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>佐々木 麻子</td>
</tr>
<tr>
<td>出版物</td>
<td>京都大学大学院教育学研究科紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>出版年月日</td>
<td>2010-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2433/108486">http://hdl.handle.net/2433/108486</a></td>
</tr>
<tr>
<td>言語</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
</tbody>
</table>

京都大学
「帰国子女の心性」について
- 文化差体験が人格形成に及ぼす影響に関する一考察 -

佐々木 麻子

I. 問題・目的

通常、人は特定の社会・文化的価値観を裏に何である上を形成するが、そこに異なる価値・文化
体系が加わるとき内閣府を生じし個体の内面に様々な変化を引き起こす可能性がある。近年、世界
規模で人・物・情報の流れが進む多様性を浴びているが、異文化接触には個人の心理状態を不安定
化させる負の側面もあり、異文化接触の個人に対する影響の特性と内訳を明確する必要がある。

異文化接触と人格形成の関連を扱った日本の研究は、「帰国子女」を対象としたものが多い。「帰
国子女」は旧文部省が用いる統計用語だが、1年以上海外に滞在したこと以外明確な定義がさ
れず、研究者による定義も少しずつ異なる。研究手法の面では、概ね2種類に分類できる。

1 つ目は、帰国子女を受け入れ校に通う児童・生徒や養育者を対象にアンケート調査を実施
した量的研究である（小林ら、1978；小林、1980, 1981 など）。これは学校現場で帰国子女の適
応状況に当たり指導を行う際、1つの指針を提供した点で意義深い研究である。また量的研究で
は、海外滞在年数・滞在時年齢・他国・学校種別・養育者の滞在国文化に対する態度などの
外的要因が心理的葛藤や適応状態を測る指標として用いる傾向がある。特に、言語の問題は、現
地語や英語などの新しい言語習得に伴う心理的負担、それと同じに日本語力維持をはかることの
難しさ、言語の習得がいっては学習者のアイデンティティ変化も影響するという視点など、多
様な観点から検討され重視されている（江原、1983；知念、2008 など）。

2 つ目は、帰国子女の面接調査や手記等で帰国子女の内省を考察する質的研究である（藤原ら、
1985；斎藤、1987；小澤、2001 など）。これは個人的な発言や体験を対象にするため、帰国子女
「個人」の葛藤や心情を理解する上で有用である。また、異文化接触の長期的な影響を成人後の
面接を通じて探る必要性を説く研究者も多いので特徴である。

前者に関しては、帰国子女の一般的傾向の把握に主眼を置くため、個人の実情や研究者が設定
した分類基準に対応しない個々の子ども心性には十分に焦点が当たらなかった。一方、後者に
に関しては、個別事例を他の帰国子女にも適用する際の客観的な指標を欠く傾向にあった。

上述した一連の研究とやや趣を異にするのは、帰国子女と保護者に面接調査を行い、異文化体
験下での子どもの社会化過程のメカニズムを検証した箕浦（1984）の研究である。その中で箕浦
は、保育年齢・滞在期間・現地人との交流度などの外的要因を変数とする量的分析と、面接
内容の質的分析を組み合わせている。その研究デザイン及び知見は示唆に富むが、箕浦は、
異文化体験の法則・原理を見出すことを研究目的としたため、個々人により異なる体験の深さの
相違や個別性を粒さに汲み取るものではなかった。重要なことは個々人がいかに「異文化」たる
ものを体験したかなのであり、より主観性に着目することが必要であろう。
また従来の研究では、単一の外国文化と自国文化の接触という二項対立的な枠組みで異文化接
触が論じられてきたが、自分の意思と無関係に国内での移動を強いる。異なる地域文化に接し
た「転校生」も、帰国子女と類似の経験をした者と捉えることはできないだろうか。転校生を対
象に含めると、外国文化と日本文化の接触という枠組みに収まらない文化差の存在が示唆される。
このような観点から筆者は、文化差の体験を重要な出来事として感受し、異質な文化を内在化
した個人と共通の何かの心性が存在すると考える。そして、この心性を「帰国子女の心性」と
名付け、その特性と構成要素の詳細を研究する。これは、帰国子女と転校生を手掛かりに、異文
化接触と人格形成の関係を考察することが、人間の共通する一般的特性を捉えることに繋がると
考えるからである。なお「異文化体験」という用語には、恰も均一な体験であるかの様なイメージ
が喚起される懸念があるため、本論文ではこれに代わる用語として「文化差体験」を用い、「国
内外を問わず、土地の移動に伴い、言語・生活環境等の文化的な差を体験すること」と定義する。

以上を踏まえ、本論文は、主な調査対象を「帰国子女」と「国内での転居・転校経験者（以下、
転校経験者と略記）」、両者に特有の心性・人格特性の有無を検討し、両者の相違点と共通点を
見出すことを目的とする。なお、本人の記憶があり人格形成に影響の強い時期にあたる4～16
歳の期間に1年以上海外に滞在し、日本に帰国した者を「帰国子女」とした。現在の文部科学省
は「帰国児童生徒」の呼称を採用し、「帰国生」の表現も広まってきただが、また社会人も調査対
象に含めるため、通称としても用いられ、対象をより広く捉え得る「帰国子女」の呼称を採用した。
また、文化差体験を重要な出来事と感受したか等の個人の主観を重視する観点から、外的要因に
よる対象者選択条件は最小限に止め、公的基準として下限である1年以上とした。さらに、文化
差体験者の対照群として、日本国内で育ち土地の移動経験のない者を「一般群」として設定した。
また量的・質的研究を組み合わせることで、対象の集団的特性・個人的特性の両方を含めた考
察が可能になるよう、質問紙調査（第一調査）と面接調査（第二調査）を組み合わせて実施した。

Ⅱ．第一調査
（1）目的
「帰国子女の心性」の特性及び構成要素の詳細を考察することを目的に質問紙調査を行った。帰
国子女及び転校経験者に特有の心性の有無を検討し相違点・共通点を見出すことも目的とした。
（2）方法
実施時期 X年7月下旬から12月上旬。協力者 D大学生・院生104名（男性52名、女性52
名）、その他の大学生・院生63名、同年代の社会人21名の計188名。内訳は、「帰国子女群（以
下、帰国群）」56名（男性22名、女性34名、平均年齢23.8歳、SD=2.91、在外平均年数5.5
年。最短例は11歳時に1年半海外滞在した22歳の協力者。欧米、アジア、中東、アフリカ各
協力者の滞在国は多様であった）、「転校経験者群（以下、転校群）」30名（男性13名、女性
17名、平均年齢20.9歳、SD=1.53。全協力者が遠隔地への移動を伴う転校を経験）、「一般群」
102名（男性53名、女性49名、平均年齢20.9歳、SD=1.72）であった。
手続き 質問紙をD大学構内で無作為に配布し、後日指定のポストに入れる形式とした。無記名
で、年齢・性別の記入ももらい、面接調査に協力可能な人には、最後に前に連絡先の記
入を求めた。その他の大学生・社会人は知人を介して連絡し、個別に郵送し回収した。

- 112 -
佐々木：「婦国子女的心性」について

質問紙は調査 1・2・3 から成る 3 部構成で、回答には統計的処理を施しプライバシーを遵守する旨明記した。調査 1 は、「婦国子女的心性」を測るための自作尺度（全 38 項目。カウンターバランスを図った）に 5 段階で評定を求めた。調査 2 は 20 項目の自作の SCT（文章完成法）に記入してもらい、調査 3 は「親の移動に伴う海外国体験の有無」・「親の移動に伴う転校・転居経験の有無」について各々、滞在国（地域）・滞在期間・その経験に関する感想を記述してもらった。


（3）結果

自作尺度の評定値は、「とてもよくあてはまる・5 点」から「全くあてはまらない・1 点」までの 5 段階評定とし、各項目について得点化した。逆転項目は評定値を反対にし得点化した。そして得られたデータを用いて因子分析（主因子法、スクエアプロットにより因子数を決定、プロマックス回転）を行った。各項目のうち因子負荷が 0.35 に満たなかった 8 項目を削除し、再度同様の手続きで因子分析をした。因子数は統計的有意性を考慮し 6 因子とした。プロマックス回転を行った結果の因子パターン表に 1、因子間関係は表 2 に示した。第 1 因子は「楽観的な気分の時と悲観的な気分の時が頻繁に入れ替わる」、「自分はこれで良いのか」と考え不安になることがある」など、不安や自己認識の不確実感を伴う項目を含むため「不確実因子」と名付けた。第 2 因子は「私は常に、物事の複数の立場に立って見る」、「自分の中にある人の自分がいるように感じる」など、多面的視点や自己認識を示す項目を含、「多面性因子」とした。第 3 因子は「人と心底分かれ合えることはないと思う」、「私の本音は人に理解してもらえないと思う」など、他人に多くを期待せず、積極的な関わりを求める項目を含むため「孤立感因子」とした。第 4 因子は「私は今の居場所に満足している（逆転項目）」などの不満に関する項目を含、 「不満足因子」とした。第 5 因子は「私は今所在場所が解決している（逆転項目）」、「自分をしは日本では出せないと思う」など日本に対する違和感に関する項目のため、「対日違和感因子」とした。第 6 因子は「人にどう思われると、自分の個性を大切にする」などの、自己を価値判断の基準にしつつ尊重する内容の項目を含むため「自己尊重因子」と名付けた。各因子得点が高い種当該因子の特徴が強くなるよう（正比例）、因子内で負の値を示した項目は、全協力者の数値を逆転させた。

抽出された 6 因子それぞれの因子得点を算出し、各因子の平均値を従属変数、経験の有無（婦国子女経験・転居及び転校経験・一般群の 3 条件）を独立変数とする被検者間 1 要因の分散分析を行った。各因子の平均値及び標準偏差を表 3 に示した。分散分析の結果、 「不確実因子」、 「不満足因子」では経験の有無の効果が有意ではなかった。「多面性」、「孤立感」、「対日違和感」、「自己尊重」の 4 因子では経験の有無の効果が有意であった（$F(2,185)=14.14, p<.001$；$F(2,185)=12.16, p<.001$；$F(2,185)=6.03, p<03$；$F(2,185)=4.46, p<.01$）。そこで 4 因子にテューキーの HSD 法による多重比較を行い、その結果を表 4 に示した。「多面性因子」において婦国群と転校群、および婦国群
と一般群の平均値の間に有意な差が認められ帰群群が高かった（p < 0.01; p < 0.01）。「自己尊重因子」では転校群の平均値が帰群群よりも有意に高く（p < 0.02）、一般群の平均値が帰群群よりも有意に高かった（p < 0.01）。「対日非和感因子」では帰群群の平均値が一般群よりも有意に高かった（p < 0.02）。 「自己尊重因子」では帰群群の平均値が転校群よりも有意に高かった（p < 0.01）。

SCTの結果は、他の調査結果との関連で重要と判断したものに限り、考察で取りあげた。

表 1

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>因子1</th>
<th>因子2</th>
<th>因子3</th>
<th>因子4</th>
<th>因子5</th>
<th>因子6</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>不確実感因子</td>
<td>多選択因子</td>
<td>孤立感因子</td>
<td>不満足感因子</td>
<td>自己尊重因子</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>実験的因子</td>
<td>0.27</td>
<td>0.28</td>
<td>0.36</td>
<td>0.27</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
</tr>
<tr>
<td>自己尊重因子</td>
<td>0.04</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
<td>0.01</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
</tr>
<tr>
<td>自己尊重因子</td>
<td>0.04</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
<td>0.01</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
</tr>
<tr>
<td>不満足感因子</td>
<td>0.04</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
<td>0.01</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
</tr>
<tr>
<td>不確実感因子</td>
<td>0.04</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
<td>0.01</td>
<td>0.04</td>
<td>0.01</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表 3

<table>
<thead>
<tr>
<th>各因子における因子得点の平均値および標準偏差</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>因子 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>不確実感因子</td>
</tr>
<tr>
<td>多選択因子</td>
</tr>
<tr>
<td>孤立感因子</td>
</tr>
<tr>
<td>不満足感因子</td>
</tr>
<tr>
<td>自己尊重因子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* p < 0.01 ** p < 0.02 *** p < 0.001

-114-
佐々木：「帰国子女の心性」について

（4）考察

「帰国子女の心性」は、「不確実」・「多面性」・「孤立感」・「不満足」・「対日違和感」・「自己尊重」の6因子で構成された。以下、各因子の特微と帰国群、転校群、一般群との関連を考察する。

「不確実因子」は、自己概念が定まらず、感情が不安定な状態を表した項目から成る。群間に有意な差が見られなかった理由は、協力者の年齢に関係があると考える。本調査の協力者は青年期後期に該当し、自己を模索し自己評価が揺動される過程にあると言える。よって文化差体験の変合いを問わず、協力者に共通して表れたと考えられる。

「多面性因子」は帰国群と転校群、帰国群と一般群の間で有意な差があり、帰国群が高い値を示した。当該因子は事物や自己を一面的に捉えずに、多面的・相対的に認識する傾向を示す因子である。また「自分の人生を決定づけた体験がある」などの項目を含むことから、重大な出来事の体験との関連で形成された多面性と考えられる。帰国子女は海外および帰国後の体験を人生の重大な転機と位置づけ、両体験を通じて、土地や地域に住むことごとに生活様式・価値観が変わることを知る。多様な価値観を目の当たりにして育つこと、自身の中にも多面性を形成していくと想定される。滞在国で常識とされた行動や価値観が、帰国後は通用せず、周囲から疎まれる事態を経験し、多くの場合混乱し苦悩する。掟所となる価値観が揺れ動く体験を重ねるうちに、物事の良い面と悪い面を見出し、その上で自己の判断を掟所にする姿勢が身につくのである。国内の移動でも、方言や県民性の違いなど価値観の混乱を招く要素はあるが、日本語・日本人という共通性は大筋で維持される。このため、滞在国では自己主張が抑えられるが、日本では和を乱すとして疎まれるなどの正反対の価値観にさらされて、両者の間で強く揺さばわることは少ないのである。これが、転校群と一般群の平均値に有意な差が表れなかった理由と考えられる。

「孤立感因子」では、転校群の平均値と一般群の平均値に有意な差はなく、帰国群のみ有意に低かった。当該因子は他者に多くを期待しない心性と「私は社会のために役立つことをしたい（負の相関のため「役立つことをしたいと思わない」と解釈した）」という社会貢献への消極性が含まれる。また「外国には行きたくない（逆転項目）（負の相関のため、全協力者の数値を反転させて逆転を取り扱い、「外国には行きたくない」と解釈した）」は、海外に活動の場を見出すことへの消極性と言えよう。よって当該因子は、人・社会に対して期待せず、自らを閉ざして距離を置くあまり方を示すと考えられる。帰国群の平均値が有意に低かったことからは、帰国子女が対人関係や社会的活動に意義を見出し積極的に関わる傾向が、他の二者に比べて強いことが示唆された。この相違の理由を第二調査の結果と合わせて後ほど考察する。

「不満足因子」で群間に有意な差が見られなかったことには、「不確実因子」と同様の解釈がでよう。本調査の協力者は、役割実験を通じて自己を模索する途上にある。目標や願望を持ち、将来の自己の可能性を追求する過程にあるといえ、協力者に共通して表れたと考えられる。

「対日違和感因子」は帰国群と転校群の間にのみ有意な差が見られた。当該因子は、日本に対する違和感と「私には掟所になる場所がある（逆転項目）」など帰属意識を持てる場所が希薄な心性を表した因子だと言える。帰国子女は基本的に、日本から海外に移動した時や海外から日本に帰国した時の二度以上、カルチャーショックを味わう。その都度掟所をしていたが、形成途中の社会・文化的規範が揺らぎ、それれに依託していた自分への疑問が生じ見直しを迫られる。海外にいた時は日本を強く意識し、帰国後は思い描いたものと異なる日本に違和を覚える自分につ

-115-
いて考えることになる。そして、日本と海外の社会・文化的規範の両方に疑問を抱くようになるため、一方を絶対視して従うこともできず、摂り所を欠くと考えられる。一般に、異文化に接触することで社会規範・自身の価値観を揺さぶられ、自己を見直す契機になると言われるが（松下、2000）、一般群は対日違和感を感じる度合いが低いという結果はこの説を支持するものと認めよう。

「自己尊重因子」は、帰国群と転校群の間での有意な差が見られた。当該因子は、自己を基準として物事を判断し尊重する傾向を示した因子と捉える。帰国群が物事の多様性を意識し、価値基準に違った特性を身につけているとすれば、そのような個人が見出したのが自己の価値観を基準にする生き方であり、自己を直接して答えを自身の中に見つけざるを得なかったと思定される。一方、転校群は価値観の揺らぎを体験した際、自己を価値基準として意識するのではなく、場に適応することを優先してきたのではないだろうか。塚本（1990）は、「とりあえず当分続く仲間に所属し」、そこから気の合う友だちを探すという転校生のあり方を捉えており、ここからも自己の志向を後回しにし、場に溶けこむことを優先する転校群の特性が示唆される。帰国群と一般群の間で有意な差が見られなかったのは、自己尊重が形成された背景が両群で異なっていたためと考えられる。各群特有の因子の組み合わせを見ると、帰国群は「多面性」・「対日違和感」・「自己尊重」の3因子が高く、一般群は「孤立感因子」が高く「自己尊重因子」は4群の中間の値を示していた。ここから、帰国群の自己尊重は多面性と対日違和感に基づき形成されたもので、一般群の自己尊重は孤立感に基づくという可能性が示唆される。当該因子の高い協力者群のSCTの結果にも両群で異なる特徴が表れた。特に「私は」は自己概念を把握する上で有効な刺激文であるが、帰国群では「自分の目的が明確にあります。／自分を探している。／心の支えとなる大事な仲間を持っている。」など自己の内面に照らされた文章が多かった一方、一般群では「タマゴ／美味しいものは孤立していると思う。／最高にいかしてる」など虚無感の表れが言葉遊びが容易であるために、自己尊重の中でも自己愛的な傾向が表れた可能性を示唆した。この傾向を示した協力者は「孤立感因子」も高く注目に値したが、特定には慎重な検討が必要である。

Ⅲ. 第二調査
（1）目的
帰国子女と転校経験者に面接を行い、事例に即して文化差体験の個人における意味合いを理解することを目的とした。また、文化差体験の個人差と共通性を見出すことも目的とした。

（2）方法
実施時期・場所 X 年9月下旬から12月上旬。所要時間は約1時間で、D大学の面接室を使用したが、遠方住着者には、静かな飲食店等協力者指定の場所で行った。協力者 第一調査協力者の内、面接への協力を示した帰国群13名（男性5名、女性8名、平均年齢24.2歳、SD=2.88）、転校群7名（男性3名、女性4名、平均年齢21.4歳、SD=1.13）の計20名行った。
手続き 面接は半構造化面接法で面接者1名（筆者）と面接協力者1名による個人面接法で行われた。質問は全協力者に共通の20項目と質問紙の結果に基づき各協力者専用に設けた5項目の計25項目で構成した。事前に「答えたくない質問には答えなくて良いこと」、「協力者はいつでも面接を中止出来ること」を伝え、丁寧に得たボイスレコーダーに録音しながら内容を記録した。

（3）結果
面接と第一調査の因子得点の結果から総合的に判断し、文化差体験の典型を示すとみなされた。
佐々木：「帰国子女の心性」について

帰国子女２名・転校経験者１名の計３事例を以下にまとめた。事例１の協力者（以下、A と略記）は、「対日違和感」を除く各因子得点が、帰国群の平均値を大きく上回り、帰国群の特性を濃厚に有した。事例２の協力者（以下、B と略記）は、「孤立感因子」が帰国群の平均に比し高いが、残りの５因子は最も帰国群の平均値に近く、帰国群の平均値に近いといえた。事例３の協力者（以下、C と略記）は、転校経験者の中で、最も帰国群の平均に近い値を示したこと、また「孤立感因子」の値が平均より高いことから、B との比較を通して、文化差体験の個人差と共通性をより鮮明に捉えられたと考えた。なお、「 」内は協力者の発言の引用で（ ）内は筆者が加筆した。

事例１ A は 26 歳の男性会社員で、国内で 2 度の転居後 10～15 歳を英語圏の E 国に滞在した。

親の海外勤務に伴い移動するのが当然と思い、E 国に行った。E 国では地元の公立小学校に通い、ESL（外国人や移民の子どもを対象に行う英語の授業）を早く修了するよう親や日本人コミュニティから暗黙のブレッシャーがあったが、意義を見出せず学ばなかった。中学で現地の親友を得たのを契機に英語を多く学び、「典型的な E 国人生活を満喫した」ことが印象に残っている。また、学校長と交渉の末 ESL を止めることで、意思表示により現状を開き続けられた。

帰国時期が未定の中で自らの意思で帰国子女受け入れ高校を受験し合格した A は、「友達とか全部を後ろ髪引かれる思いで置いてきた国だから帰国を楽しみにしていた。生徒の 2/3 が帰国子女である高校に違和感はなかったが、年齢による上下関係が厳しい学生活や部活動は過酷で疑問を感じた。自分の高校レベルの英語に対する劣等感の克服と学業を目的に、大学時に F 国に留学した。そこでの交流を通じて英語に対する劣等感は解消し、現在の職業選択に影響した。

多くの E 国帰りの帰国子女は E 国に誇りと優越感を持つが、大学進学時にはそれが経験・知識不足による偏った見方であると気付く。A も異質な人・文化を受け入れる E 国を尊敬するが、その政治的背景には違和感があるという。また A は、海外生活がなければ今と違う自分になっていったという。10 歳で強制的に E 国へ行き英語を学ばなければならない、本来語学が苦手な A は英語が必須の現在の仕事に就いておらず、海外経験が結果的に可能性を広げたという。また海外の視点から日本を見ることができ、日本と海外の両方に興味を持つ機会となった。小学 5・6 年時は日本へ、高校の部活動が辛い時期は E 国への帰国を望み、苦境に陥るほど逃げたが、現在は辛くても特定の場所で帰りたい感覚はない。A は日本・海外の違和感はなく、人は目的意識を持ち持ち込む物がなければ、それが自分の居場所に繋がり、安定を得られるという。つまり最終的に土地や国ではなく個人の目的意識こそが違和感を左右するのだという。だが海外に住み、辛い時期に E 国に帰りたいと思ったからこそそう思うのかもしれないとも述べた。現在は、海外での在住経験により自己認識や価値観が自分の内面で対立することなく、常に自分は自分だと感じる。

また高校 3 年時に日本人に自分の E 国人らしさを指摘されたが E 国人から見たら明らかに E 国人ではない自己像に葛藤したという。葛藤の末、自分は E 国人・日本人という概念では測れず、ミックスされた状態こそが自分であると気付き、それ以来、悩む必要は無いと思った。その際、同じ悩みを持つ他の帰国子女と話したことをの意識も大きかったという。

事例２ B は 24 歳の女子大学生で 8～11 歳を英語圏の G、11～13 歳を中東の H 国に滞在した。

B は小学 2 年で親の海外勤務に伴い G 国に移動した。現地で公立小学校に通うが 1 年目の英語を話せず、日本語を話すとからかわれるため泣いて過ごした。2 年目にいじめられた子に対し初めて英語で反撃し、相手が衝撃を受けた瞬間が転機となった。文法が分かりずとも感情に合う単語を
ならば伝えを実感し、以後、学校での立場や友人関係を改善した。3 年目に H 国への移動が決まり、上達した英語を使う機会がなくなることが残念だった。H 国には日本人学校しかなく、「（G 国との）感情の違いを感じ。自分自身の体で言う帰国子女っぽさを痛感し、自分は日本の学校に行こうという感じて浮くのだ。」と気付いた。厳しい宗教上の規律を守る H 国の常識に驚いた。学校で愛国心を育て付けられたため G 国の正義を疑うことにはなかったが、G 国に敵対する側にも相応の見解があることを H 国で知り、公平な見方を築くことができたと語った。

日本の帰国当初は、治療が良く服薬や食物が自由になり嬉しい反面、それを行ったり前屋に享受する日本人に疑問を感じ、帰国子女が珍しい中学校に転入したが、女子全体で仲の良いグループが形成されていたため、自動的に仲間に入れてもらえ、すぐ馴染めた。だが英語の発音が目立たぬよう気を使った。その後成績競争に関心が向き、G 国や H 国への帰国は望まなかった。

持続した友人関係はなく「人とは区切りを入れて付き合っていくもの」という意識が強くある反面、海外移動の陰で再会しても区切り時点からやり直せるという利点も感じる。親は、海外生活によって B が人間関係を断絶した潜在記憶を持つために人間関係を切る癖がついたのだと懸念するが、本人は、この性格が今では自分の判断であり、特に問題を感じないという。

海外生活がなければ、今とは全く違う自分になっていたと思う。B は自分の英語力や学力全てが帰国子女・海外生活に還元されるため、努力が正当に評価されず悔しいという。だが海外生活を悔やむことはなく、自分で選び受験した高校を卒業し、人生選び、直した自信と実感を持ってたことが人生の転機ではないかという。一カ所の滞在期間が 6 年以上になると、生活には慣れるが水が漏るような空しさを感じるため移動する。流流の民のような寂しさを感じる時もあるが、家族のいる場所こそが居場所であり、自分も見失わず保てるという。自分の中に複数の考えが同時に浮かび、時折もう 1 人の自分がいると感じるが、異なる意見は両立することなく、中立的観点で自分を監督席から見る様で、極端な思考や行動を制御するのに便利だという。「どこに行っても大丈夫だ、的な人が自分の中に 1 人か 2 人いて、その人のことを信用して」次に進むという。

事例 C：21 歳の女子大学生で、3～7 歳を 1 県、7～18 歳を 2 県で生活した（転校経験者）。

I 県では、ミッション系の幼稚園と小学校に通い、英語や宗教の授業があった。クラスにはハイブの子がおり、皆仲が良く楽しかった。J 県に引っ越すのが早いか、人格形成に重要な時期を過ごした 1 県には思い入れがある。J 県では、雑誌が発売日に買ったり交通の便が良いことが嬉しかったが、友達との別れは辛かった。小 2 の途中で転出し仲間に入る機会を逸し馴染めず、3 年程 1 県が恋しかった。J 県の方がうまく使えず "言葉おかしいね" と言われショックだった。小 5 で友達ができ J 県に慣れた後も 1 県に帰りたい、せめて小学校卒業まで 1 県に居たいと思った。I 県ののんびりした空気、幼稚園・小学校の博学的な教えが自分の人格形成に影響したと感じる。またハイブの子とその個性をそのまま受容した 1 県の小学校に比べ J 県の小学校には異質な者を受容しない経営気を感じ、自分が周囲から変わり者扱いされも理解できなかった。

I 県から J 県への移動がなければ、今と異なる自分であると思う。I 県のままだと温室育ちの部分が残り、社会に出た時に簡単に傷ついたと思う。I 県と J 県の間で葛藤を体験し、長い間 J 県出身と言うことに違和感があった。I 県の 4 年間がなければ自分も異質な者に不覚えな人間にだったと思うし、I 県での体験は重要だった。10 年位前から I 県が注目され、I 県にいたことを誇りに思えて以来、「両方を過ごした事自体が自分のアイデンティティだと思うようになった。」今で
佐々木：「帰国子女の心性」について

はI県とJ県の体験は分離しておらず、各々が調和して自分を形成しているという。海外では気楽に過ごすが、日本が自分の場所ではないとも思わない。地元で育ちそこに住む人に比べると確固たるものがない自分を感じるが、今は身軽で自由という利点も感じている。

帰国子女の面接協力者13名はすべて、「海外体験がなければ今とは異なる自分になっていたと思う」と明確に即答した。これに対し転校経験者の半数は「移動経験がなければ異なる自分になっていたと思う」と明言したが、残る半数は「少し違っていたと思う」、「成長の過程と区別して考えるのは難しい」と各々異なる回答であった。

（4）考察

帰国群・転校群の代表的な事例を3例挙げたが、各自の文化差体験は多様であった。

Aは英語を苦労して学ぶにも、現地の親友とE国・学生生活を満喫したことで、英語を自然に習得した。また、交渉の末ESLを止め、意思に基づく行動が解決に繋がるのを知る。これにより、受動的な学習をより積極的に人と関わり楽しみを追求する方に価値を見出したといえる。日本で期待し帰国のAには厳しい上下関係のある寮生活と部活動は辛かったが、逃げずに続けた。また帰国後完全なE国にないのにもE国的に見られる自分に葛藤するも、内に縛らず積極的に自分と環境に向き合った。Aの生き方の基本には、辛い現実や困難に直面しても、逃げずに積極的に関与する姿勢がある。これは、E国で後の生き方の指針となる原体験ももいる体験をしたためであり、この姿勢は帰国後も一貫して見られる。帰国子女の友人と悩みを共有し考え合えたことが葛藤に向き合う助けになり、「自分は自分」という明確な自己像を形成したといえる。

BはG国で、努力して英語を上達させるとともに、日本語の維持に努めた。受け身から反撃に転じることで友人関係を改善した体験を持ち、G国とH国で善悪は立場により異なることを知る。自分で選んだ高校に入学し卒業したことで、親の都合に振り回されるだけの人生ではないと思えたことが転機になった。人と区切りをつけて付き合い、定期的な移動に寂しさを感じても、自分の選択である限り問題はないという。Bには、「自分を選択」が大きな意味を持つといえる。

Bは帰国子女でなければ、英語や学力向上のための努力が評価され、悔しい思いをせずに済んだと思う。Bには海外で得た価値感も大事だったが、それ以上に、言語と学力維持の努力が重要だったのではないか。しかし、それが海外に在住した事実のみに還元されてしまい、努力が正当に評価・理解されないことによる悔しさと憤りを感じた。Bは海外生活を理由に自分が大切にした努力を否定され、内面の連続性を失った。これが、Bにとっての文化差体験だったと筆者は考える。この体験により、「自分の努力は他人には分からない」というある種の不信感や他者に多くを期待しない心情を抱き、中学校に同様の迷惑を持つ帰国子女がいなかったことも影響し、不信感や憤りに向かう機会を逸した。そうして友人関係よりも可視的な評価基準である学力に力を注いでいたのだと考えられる。自分の選択である限りこの生き方に問題はないとBは言うが、自らを「流氷の民」にみなされたように、その根拠には、一つ処に留まり難い浮き草のような不安定さや寂しさがあることを感じさせる。定期的に移動し、人に深く関わりず区切りをつけ付き合うのも、この原体験のためではないだろうか。AとBの人との関わり方が違い、両者の原体験、つまり文化差体験の違いに基づいて形成されたと言える。

CはI県で培った個性尊重の姿勢・博愛的傾向がJ県では通用せず、変わり者と見なされる体
駅した。C に流 I 県の 4 年間で吸収した価値観は重要で、“言葉がおきがわ悪”という発言に端的に表れた。異質な主に不寛容な J 県の労固気やその排他性に心理的葛藤が生じたと考えられる。価値を見出していた思想・生き方を否定された体験が、C にとっての文化差体験だったのではないかだろうか。C が再び I 県を誇りに思い、両方があってこそ自己だと思うまでに、少なくとも 5 年の歳月を要したことにも、文化差体験によって抱いた葛藤の深さが表れていると考える。

3 名の事例を通じて、文化差体験によって直接受けた影響と、体験が内在化され、内的過程に影響を与える側面のあることが判明した。A は E 国での文化差体験が考え方の基礎になり、B と C は自己が信じ大切にした価値観を否定されるのが文化差体験だった。B と C の「孤立感」・「対日違和感」因子が高いことも、他者からの否定を伴う文化差体験の影響と深く関連すると筆者は考える。両者は現状について、「問題を感じない」(B)、「今は身軽で自由」(C) などと一定の肯定を示した一方、人間関係を切る癖や一定期間後に移動したくなる生き方に「流浪の民」(B) を重ねたり、「地元で育ちそこに住む人に比べると確固たるものがない自分」(C) を感じるなど、寂しさや欠落感を語った。人格形成により重要な時期に価値観を否定され、傷つき不自信を抱いたことで、他者との関係や状況の改善に多くを期待しないあり方を身につけたと考えられる。両者の語りに、自身の状態に関する疑問、揺ぎや寂しさが繰り込まれていることに鑑みると、達観した人生観に基づく現状肯定というよりは、他者や社会に積極的に働きかけないこと、周囲からの影響を抑えようとする心性が働いて形成したとみなすことができる。価値観の否定により受けた影響が未消化まま沈滞し、それが経験の高さとして浮き彫りになったのだと考えられる。

以上見てきたように、文化差体験は文字通りその環境での体験が意味を持つことであれば、信じるものに否定で生じる心の中の断絶を意味することもある。このため、文化差体験は人や社会との関わり方や人生の歩み方に異なる形で影響を及ぼすのだといえよう。

IV．総合考察

第一調査では「多面性因子」が帰国群で有意に高かった。面接でも物事や自己認識を多角的・中立的な視点で捉えた発言が多く、多面性の高さが観察された。SCT では刺激文を問わず、対象の肯定・否定両側面を捉えた文章を書く傾向に顕著に示されたこともこれに支持する結果といえよう。結果を一部挙げると、結果を一部挙げると、「日本は」日常生活が便利な国だが、息がまることが多い。」「海外で私」苦労した。でもその分良いことはあった。」「言葉は」何も与えないことがあるが、相手の全てを変えることもある。」「私は」実は人がとても手手だ。でも人はすき。」などである。

小林（2003）が考察した SCT-B は、刺激文完成後に用紙をめくると、「a」という接続助詞が現れる仕組みになっており、それに続いて被検者が記述した内容から、反応パターンを探る SCT の応用テストである。小林は、反応パターンを「受容」（自意）（肯定否定）などに分類し検討しているが、前に挙げた帰国群の SCT 結果は、その（肯定否定）に当てはまる。SCT-B では、接続助詞を設けることで被検者の二面的感情を操作的に引出したが、自己接続助詞を用いて物事の肯定・否定両側面を記述した帰国群は、日常的にそのような反応パターンを有しているといえるのではないか。転校群は「多面性因子」の平均値が低く、集団特性としての多面性は顕著に表れなかった。面接を通じて、転校群では文化差体験による影響の個人差が大きいことが示唆されたが、多面性を伺わせる発言が個別面接では示されることはなかったこと、この個人差の大きさと関連すると思われる。文化差体験の影響を強く受け、自己を意識した協力者において、多角的に
佐々木：「帰国子女の心性」について

事物を捉えた発言が多く見出せたことからも、文化差体験と多面性の関連の強さが指摘できるよう。
帰国子女と転校経験者に共通したのは、学科選択など区切りの悪い時期の移動は困難を伴い、自己効力感を持ち難いことだった。また、複数の言語・方言の習得や維持の努力、両方を完璧に話せない場合に生じやすい周囲の無理解や心理的負担など、言語体験にまつわる思いが切実に語られており、その影響の大きさが示された。だが、親の都合で移動する思い通りにならない現実の中でも、意思を貫き、進路・職業など何らかの選択をやり直したという思いを得た協力者は、自己の体験を中立的に評価・受容する傾向があり、概して「自己尊重因子」の得点が平均値以上だった。ここから、自らの選択がその後の自己受容を導く重要な契機の一つになると示唆された。

対日違和感に言及した発言を帰国子女全員が述べたが、日本社会・日本人に対する単純な否定感情や滞在国に帰りたいという希望は帰国後 3 年程で減退する傾向があった。むしろ心情・言語面で「日本人らしさ」が不足し、滞在国で受けた影響を持ちつつも完全にはその滞在国の人になりえない中途半端な自己像に葛藤する。しかし高校・大学を境に、国や土地ではなく、「自分は自分」というように両者を兼ね葛藤した自己を受容し、納得することが自己を決定すると感じる。その状態を A は「ミックスされた自分」と言い、他の協力者は「マームル模様」と表現した。「自分は自分」と納得の後は、居場所や親友を自己や周囲の人間関係の中に見出す傾向もあったが、その後の選択では、安定を出す者と揺れる者を求める転替えの如きに別れた。文化差体験が他者への不信感を導いたかなど詳細に検討することで、この相違の契機が理解可能なと示唆された。

日本の気質しさに言及した転校経験者はいたが、海外と比較して否定感情を示す者はいなかった。しかし C は土地の移動に伴う自己概念の葛藤に言及し、確固たる本拠地や拠り所を欠いた、この点において、帰国子女 B との共通性が見出せる。文化差体験者には通ずる性質として、「対日違和感因子」の中でも特に、帰るべき場所や拠り所への欠如感に着目する必要があると考えた。

転校群で「孤立感因子」が有意に高く、面接はそれを裏付ける結果であった。移動の結果、持続する友人のいない寂しさや親人関係を緊張するという協力者が複数いた。移動先で馴染む苦労が身に染み環境変化に消極的とも述べた。持続する友人のいない寂しさに言及した帰国子女はいたが、親人関係の緊張や環境変化に消極的との発言はなく、環境に主体的関与する効力感を体験した帰国子女と、場に合わせることで解決を図る転校群の傾向から、両者の相違は説明し得る。

自己内に二重性を感じた協力者は、帰国子女、転校経験者双方にいたが、2 つの思考や感情、々が交互する感覚はあるものの、最終的には一貫し自己に集約されるという。つまり二重性・多重性を自覚し煩わしさや葛藤を抱えても、それを個性として受容する傾向が示されたのである。本調査は日本語で行われたため、日本語の心理的構造内の自己像に限局し語られた可能性を考慮する必要がある。だが仮にそうしたとしても、複数言語環境を経て、日本語環境にあたる協力者の現状に即したものといえ、文化差体験者の自己認識の一つのあり方を示唆するのではないかだろう。

「帰国子女の心性」は 6 項目に構成されているが、特に「多面性」・「対日違和感」・「自己尊重」・「孤立感」の 4 因子に着目することで、文化差体験者の集団心性がより鮮明に浮かび上がると考えられる。あえて単純化して述べると、帰国子女群の集団心性の特徴は「物事を多面的に認識し、日本に違和感を感じ揺挾に欠けるが、自己を価値・行動の指針として尊重し、人・社会に精神的に関与することに意義を見出す」となる。一方、転校経験者は「日本に違和感を感じ揺挾に欠ける傾向があり、人・社会への関与が消極的」となる。だが各自の因子得点では「孤立感」が高い
帰国子女や「対日進和感」の低い転校経験者あたりおり結果は多様で、どの因子の特徴が顕著になるかは個人差があった。従って S C T の結果を踏まえ個人差を見ると、帰国子女や転校経験者の心性を理解する鍵が文化差体験であった。つまり、全体的傾向を把握する上で「帰国子女の心性」に着目することは有効だが、どの要素が顕著になり人格を形成するかは、文化差体験が個々人にもたらした意味合いにより異なるのであり、その意味合いを丁寧に挿げ取ることが重要といえる。

本研究では、帰国子女のみならず、転校経験者を対象にすることで、文化差体験者の心性を多角的に理解する端緒を得た。一方、課題も残る。特に転校群の集団特性に関して、更なる検討が必要と考える。例えば、「日本に違和感があるが、海外に親和性を感じることはない」と転校群の心性を十分汲み取るために、挿げ所を欠く心性を問う項目を増やすなど、尺度の改良をはかりたい。

また親子関係の影響を重視する先行研究もあるが、本調査では、親の態度・価値観に言及した協力者は少なく、それも文化差体験への影響を直接関連付けたものではなかったため、この点は今後慎重に検討したい。更に、「帰国子女の心性」の高い一般群の協力者にも面接を行うなど、本研究で新たに生じた疑問点を掘り下げ、人間に共通する一般的な心性をより深く捉えたいと考える。

〈付記〉本論文は京都大学教育学部に提出した卒業論文を加筆修正したものである。論文指導頂きました桑原知子先生、岡田康伸先生、調査にご協力下さりました皆様に深謝いたします。

〈引用文献〉
知念聰美(2008)：二言語で育つ子どものアイデンティティ 佐藤誠也他編 アメリカで育つ日本の子どもたちパーソナルの光と影 明石書店 Pp.172-190。
藤原喜和他(1985)：帰国生の適応過程に関する心理学的研究 東京学芸大学紀要 11部 科学 36 Pp.71-81。
藤原ナオミ(1987)：「海外成長日本人」の適応における内部葛藤 異文化間教育 1 異文化間教育学会アカデミア出版会 Pp.67-80。
小林哲也(2003)：文章完成法を応用したテスト S C T について 京都大学大学院教育学研究科博士論文
小林哲也他(1978)：在外・帰国子女の適応に関する調査報告 京都大学教育学部比較教育研究室
小林哲也(1980)：海外帰国子女の適応 星野倫編 カルチャー・ショック 現代のエスプリ 161
至文堂 Pp.83-101。
小林哲也(1981)：海外教育体系・帰国子女教育 有斐閣新書
松下光子(2000)：異文化体験 久世敏雄・斎藤耕二(監修) 青年心理学 福村出版 Pp.283。
篠浦康子(1984)：子供の異文化体験 思索社
小澤理恵子(2001)：異文化間トランスの(耐性)と(寛容さ)について 異文化間教育 15
異文化間教育学会アカデミア出版会 Pp.31-52。
塩本美恵子(1990)：新しい環境への適応-適応の概念と転校生の学校適応に関する調査報告(1)
国際基督教大学学報 1-6 教育研究 32 Pp.111-133。
A Study on ‘Returnee Student Tendency’:
About the Effect of Experience of Cultural Differences on the Formation of Personality

SASAKI Asako

This study examines the personality of people who experienced cultural differences and internalized foreign culture by moving to another area or a country. In Study I, the questionnaire consists of 38 items for measuring the personality named “Returnee Student Tendency”, and SCT (Sentence Completion Test) consisted of 20 items. The author composed both. They were given to 3 groups of Japanese university students and workers in their twenties: Returnee Students who had lived abroad for more than one year in their childhood resulting from their parents’ overseas job assignments (N = 56); School Transfer Students, who had experienced school transfers in Japan because of their parents’ job-related moves (N = 30); Traditional Students (N = 102). The results of the factor analysis on 188 items of data totaled 6: insecurity, multiplicity, isolation, dissatisfaction, sense of incongruity with Japan, and self-respect. The results of multiple comparison showed some similarities between the personality peculiar to Returnee Students and to School Transfer Students. In Study II, 13 Returnee Students and 7 School Transfer Students were interviewed. From the results of Study I and Study II, it was considered that the key factor influencing the formation of personalities was the personal meaning of the experience of cultural differences.